

目的 文楽については浄瑠璃・人形・舞台等各方面で種々研究がなされているが、人形の衣裳に關するものは殆んど皆無といつてよい。その上、古い衣裳は大羊焼失しており、僅かに焼け残った衣裳も舞台観賞用にはむかないとの見地から散逸してしまつていたので現在公演に使用されている衣裳について調査し体系づけていきたいと考えた。今回は特殊な衣裳が数多くみられる国戦爺合戦をとりあげた。

方法 大夜朝日座(旧文楽座)において昭和44年7月公演に上演された国戦爺合戦のうち櫻門の段・甘輝館の段・紅流しより獅子ヶ城の段における人形とスライドにおさめ、千秋業後に脱がせた衣裳の調査を行なった。

結果 狂言の主役である和藤内は日本へ亡命中の明の鄭芝龍と日本婦人との間に生まれた混血児で武勇に秀でており父の国・明国の再興に尽力するという物語りであるから本公演の舞台は中国であり、和藤内の異母姉である錦祥女、その夫甘輝・使用人など多くの唐衣裳をみるこゝができた。日本の着付は老母の着付と和藤内が日本から渡った折りの縄縫大寸着付だけである。大寸の人形は権力・武勇を示すものであるから、これは和藤内の力を示したものである。着付の下には胴丸と着込んで戦いにのぞんでいるが鄭成功と号して後には唐装束に改められており、うりの皮・衾袈裟・たくぼくなど特殊な衣裳がみられたので実物を公開して報告する。

尚これまで関西支部においては人形衣裳の縫製を報告してきたが今回より通し番号にさせていただったので為念